

母親としての発達に関する研究の展望

— 葛藤場面に注目して —

井上 芳世子

(2003年9月30日受理)

Review of research of development women as mother
—Conflict of parenting as a factor for development—

Kayoko Inoue

Many studies concerning development of women as mother has indicated that women develop their personality through parenting of children. The development of personality in women has two aspects: changes of self as mother and changes of self as oneself. These two aspects seem to be profoundly related with relationships with children, husband, and other people around the family. One factor causing the development of personality in women should be everyday conflicts of parenting, because everyday conflicts of parenting often promote the accommodation of these relationships, and as a result, women may experience change of self as mother and oneself.

Key words: development, mother, self, parenting, relationship, personality

キーワード：発達，母親，自己，親業，関係性，パーソナリティ

昨今，子育ての大変さ，困難さが社会問題となっている。そのようなネガティブなイメージは，女性が子どもを持ち母親となることにマイナスの影響を及ぼしていると考えられる。しかし，母親となることは，そのようなマイナスな側面ばかりではない。近年，生涯発達についての関心が高まる中，親となり人格的な成長を遂げることは，様々な生き方が存在する現在でも，成人期の発達の主要な側面であり，親としての人間的成長はむしろ子育ての誘因だといえる。

そこで，本研究では，これまで母親の発達はどのようにとらえられてきたのかを概観するとともに，どの母親も直面する子育てにおける“葛藤”場面に注目し，それが母親としての発達にどのように関わっているのかについて検討することを目的とする。

母親としての発達はどのように捉えられてきたか

従来，女性は子どもを持てば母性が開花し，誰にで

も画一的に育児の適正があると考えられてきた。大日向(1988)は，園児から高校生までの子どもを持つ母親957人(平均年齢40.8歳，レンジ26-56歳)に，子どもに対する“相手を理解し，支えたい”という愛着意識と“相手から理解され，支えてもらいたい”という愛着意識について調査した。その結果，子どもを理解し支えてあげたいという愛着意識は，子どもの年齢による差は見られないが，相手に理解され支えてもらいたいという愛着意識は，子どもの年齢とともに増加することがわかった。すなわち，母親が子どもに対して抱く愛着意識にも，子育てを通して形成されていくものが存在することを示した。また，そのような愛着意識の形成には，母親を取り巻く対人関係，特に夫の存在が大きく影響することも明らかになった。

一方，柏木・若松(1994)は，これまで子どもの発達の説明変数としての親から，育児を通して親自身も発達する存在であることを明らかにしている。“親となること”による変化・発達に関する50項目からなる質問紙を作成し，3-5歳児を持つ父親および母親に実

施した。その結果，“柔軟さ”“自己抑制”“視野の広がり”“運命・信仰・伝統の受容”“生きがい・存在感”“自己の強さ”の6尺度を見いだし、親としての発達の内容を明らかにした。また、親としての成長への認知に、育児への参加の程度や育児のとらえ方（肯定的、否定的）が影響することも示している。

山口（1997）は、子どもを持った女性が、いつ自分自身を“一人前の母親”として認知するのかについて、園児を持つ母親（平均年齢35.6歳、レンジ24-48歳）に自由記述による回答を求めた。その結果、基準1「自分の利害よりも子どものことを優先して考えるようになること」と基準2「自らの育児に自信を持つこと」を満たしたとき自らを一人前の母親として認知するようになることを明らかにした。すなわち、母親自身による独自の“母親発達観”の存在を明らかにしたといえるだろう。

小野寺（2003）は、妊娠7-8ヶ月から親になっての3年間の間に、どのように自己概念が変化するかを検討した。その結果、「活動性」「怒り・イライラ」「情緒不安定」「養護性」「神経質」「未成熟」の6尺度からなる自己概念のうち、女性は母親になることによって「怒り・イライラ」が徐々に強くなるが、他の5尺度では有意な変化は見られないことがわかった。また女性は母親になると自尊感情が低くなる傾向も見られた。すなわち、子どもが生後3年までの間において、母親の内面的な気質の部分は変化しにくい、「怒り・イライラ」や自尊感情の低下といったネガティブな発達が見られるといえるだろう。

このように母親としての発達は、従来の生得的な母性観とは異なり、子育てを通し獲得されるものといえるだろう。そして、その母親としての発達の内容には、以下のようなことが考えられる。まず、大日向（1988）や山口（1997）が示すように、子どもとの関係性の中で形成される“母親としての自分”に関する母性意識である。そして、柏木ら（1994）や小野寺（2003）が示すような、子育てを行う中での他者との関係性（子ども、夫、他者）において形成・変容される“自己としての自分”に関する自己意識である。その中には、ポジティブなもの、ネガティブなもの両面が考えられる。しかし、柏木らの示した自己意識に関する変容が、自己の内的側面の変容と他者に対する認知の変容を含んでいるのに対し、小野寺の研究では人格の内面的側面を中心にしたものであった。

伊藤（1999）が指摘するように、女性の発達には“関係性の維持”という視点が必要不可欠であると考えられる。それは、子育てを含むケアというものが、関係性の中で行われるからだといえるだろう。平山

（1999）は、3-5歳児の幼児を持つ母親401人に「家族内ケア」（対児ケア、対夫ケア、家事（対家族ケア））をおこなう上での感情・意識について調べている。その結果，“家族内ケア全般への否定感”，“対児ケアへの肯定感”，“対夫身辺的ケアへの肯定感”，“家事への肯定感”の4因子が抽出され、育児だけでなく、家事、夫の身の回りの世話を含む家族内全体のケアを行うことが、母親にとって否定的に意識されていることがわかった。すなわちそれは、育児不安や育児ストレスについて考えるとき、育児だけの要因のみに焦点をあてることの不十分さを指摘しているといえるだろう。また、岡本（1996）も、母親は家族という人間関係の中で育児に従事しており、育児への参加や育児への感情は、家族の人間関係に媒介されるものであるとしている。

これらのことから、母親の発達について考える際には、子どもだけでなく夫や家族メンバーとの関係性を考慮に入れる必要がある。すなわち、母親としての発達とは、他者との関係性を築く中で、その関係性に適合するように“自己を変容させる”ことだといえるのではないだろうか。そしてそれは、大日向（2001）が指摘するように、ある程度までは文化に典型的・共通のものだといえるが、その大部分は個人的多様性が反映された“母親としての発達”といえるだろう。

母親としての発達を規定する要因 —なぜ葛藤場面に注目するのか

これまで、母親としての発達を規定する様々な要因が検討されてきた。育児への参加の程度（柏木・若松，1994）や職業の有無（目良，2001）、学歴（平山，1999）、子どもの位置（永久，1995）、育児目標（Hastings & Grusec，1998）、子育ての意味づけ（徳田，1995）、夫・子どもとの関係（井上・湯澤，2002）などが、母親としての発達や生活感情、育児行動や母親への適応に影響を及ぼすことが明らかになっている。このような要因の多さからも、まさに十人十色の母親像が見て取れる。

一方、母親の発達を新たな視点で捉えた研究がある。菅野（2001）は、“母親が子どもをイヤになること”に注目し、その影響について検討している。母親が育児の中で当たり前を経験する子どもに対する不快感情は、直接的にはこれまで日本ではあまり取りあげられてこなかった。しかし、育児不安や育児ストレスなどの研究は、子育てを通して母親が感じる否定的な感情を明らかにしたといえる。しかし、否定的感情が母子関係において積極的な役割を果たすことについて具体

的な検討があまり行われてこなかった。

そこで菅野 (2001) は、不快感情の内容とそれに対する説明づけ (accounting) から、母子関係へのポジティブな役割への可能性を記述的に検討した。その結果、不快感情には、日常的課題場面 (就寝時や食事中など) での子どもの不従順な行動や、課題がない場面での以前と変化した行動に対して生じていた。また不快感情と説明づけとの関連を検討した結果、母親は不快感情を契機に子どもの育ちや自らの関わり方を振り返っており、その振り返り方は課題の有無によって異なっていた。すなわち、振り返りにより、母親は子どもの見方や自分の関わり方の安定や修正を測っていることが示唆された。

氏家 (1999) も、親としての適応とは、思い通りにならない子どもへの扱いと、それ以上に思い通りにならない自分自身へのネガティブな感情の処理を含んでいると指摘している。親たちの悩みの多くは、自分の親業への自信のなさや不安からくるものである。それは、親になる前にはほとんど経験していない新奇な経験だといえる。親業を行う中で、子どもとぶつかるたびに、自分自身の行動—思考—感情を調整するスキルが、親であるための必要なスキルとなってくるのだろう。これが、育児=育自である所以だと考えられる。

徳田 (2003) は、母親になるという経験や育児が、様々な感情や相容れない要素が複雑にからみ合う経験であるという視点から、母親が日常感じている緊張や対立をどのように受け止め、それに対処し、自らの経験として統合しているのかを調査している。第1子が0-3歳でフルタイムの職業に従事していない38名の母親 (平均年齢: 30.0歳, 子どもの平均年齢: 15.3ヶ月) を対象に、“獲得”と“喪失”の側面から、女性が母親になり、子どもを育てるといった経験の特徴を明らかにすることを試みている。その結果、子育てによる自己の変化については、獲得と喪失の両側面から語られていた。しかし、子育てによる喪失の側面については、多くの母親が、喪失の側面にプラスの価値づけを行う等、再評価し、自己の経験として受け入れる語りを行っていた。すなわち、子育てという新奇な経験に従事する中で、獲得だけでなく、喪失も確実に経験しながらも、それを自己の中に受け入れ統合していく過程が示されているといえるだろう。そして、子育てにおける経験において、獲得と喪失の両側面が、母親としての適応に重要な要素となっていることが推察される。

このように、これまで多くの研究の中でふれられてきた母親の“葛藤”の様子は、母親としての発達プロセスの実際を記述し、母親としての発達の全体像を明らかにする上で重要な指標であるといえるだろう。

母親としての発達に関わる重要な視点

母親としての発達が多様なものであり、さらにごく日常的な場面である葛藤場面に、母親としての発達のリアリティが存在するのではないかとすることは、以上に述べた。以下では、母親としての発達を検討していく上で、考慮すべき重要な視点について述べたい。

まず、母親としての発達を示す指標をどこにおくかという点である。山口 (1997) は、母親としての発達の程度は、子どもの発達の程度に従属していると述べている。これは、母親としての発達は子どもとの関係性の中においてのみ発現すると考えられるからだ。確かに従来、子どもの発達の説明変数的な存在であった母親は、子どもの発達を通してのみ語られたのかもしれない。だがここで、母親としての発達とは何かということが改めて問い直される。母親は育児を行う中で、子どもの発達に伴い、その発達状態に合わせて自らを変容していく必要がある。そして子育てというものが、対子どもだけの関係性ではないことを考えると、母親としての発達とは、子育てを通して生じる他者との関係性の変化に応じて自己を変容させていく必要性に起因するといえる。すなわち、母親としての発達を示す指標になるものは、子どものみならず、夫やまわりの他者の発達の程度に従属しているといえるのではないだろうか。子どもの成長にとどまらず、成人期の発達、生涯発達と様々な発達理論を用いた研究が求められるだろう。

次に、多様な母親像が存在する現在、「母親としての発達」に関する研究から、何を明らかにしていく必要があるかという点である。大日向 (2001) は、最近の母子関係に関する研究の飛躍的な増加とは裏腹に、子育ての現実的な問題にどこまで心理学の研究が貢献できるのかについて疑問を投げかけている。それは、心理学的法則を用いて、特定の文化に密着した特定の型の人間を明らかにする必要性を指摘している。現在の社会には、様々な価値観とともに、様々な家族形態が存在する。そのような中で、「多くの母親の平均値」を明らかにするだけでは、真の意味での子育て支援とはならないといえるだろう。無藤 (1995) は、生涯発達を支えるソーシャルサポートについて、以下のように述べている。親子・夫婦・親友などといった“支え合って生きている”と同時に“共に生きている”関係では、“自らを親しい人と共に成長させていくこと”が必要であると指摘している。それはすなわち、問題にぶつかった際、自分で考える力であり、まわりの人と問題を共有していく力である。母親自身を成長させ、家族やまわりの他者おも成長させていく際にかかわる

要因を明らかにしていくことが求められるといえるだろう。そのためには、それぞれの母親が直面している現状（環境）をベースに、多様な母親たちを分類した上で、検討していかなければならないだろう。それは同時に、それぞれの要因がどのように相互作用するのかを明らかにしていくことでもある。そのための質的データは、まだまだ不十分であるといえるだろう。菅原（2003）が示すように、質的データの長期にわたる積み重ねのもとに考察された視点が求められているといえるだろう。

まとめ

本研究では、これまで生得的なものだと考えられてきた母親としての発達、子育てを通し獲得されるものだとすることを明らかにした。そして母親としての発達の内容は、“母親としての自分”の変化と“自己としての自分”の変化の2側面があることがわかった。すなわち、母親としての発達とは、子育てを通し築く他者（子ども、夫、家族）との関係性の中で、その関係性に適合するように“自己を変容させること”であるといえるだろう。またそのような発達を起因する要因として、日々母親が会う子育てにおける“葛藤”場面が考えられる。なぜなら、日々の育児における葛藤は、母親の育児への振り返りや自分自身の行動—思考—感情の調整、自己の経験としての統合など、母親としての適応を促進するきっかけになっていることが予測される。その結果、母親として、また自己としての人格変容がもたらされるといえるだろう。だが、母親が築く関係性には、夫との関係性もあり、“妻としての自分”が母親としての発達に関わっている可能性も考えられる。今後、この点を視野に入れて検討していく必要があるだろう。

【引用文献】

- Hastings, P. D. & Grusec, J. E. 1998 Parenting goals as organizers of responses to parent-child disagreement. *Developmental Psychology*. Vol.34, 465-479.
- 平山順子 1999 家族を“ケア”するということ—育児期の女性の感情・意識を中心に— 家族心理学研究, 13, 29-47.
- 井上芳世子・湯澤正通 2002 夫・子どもとの関係、対人態度が母親としての成長に及ぼす影響 心理学研究, 73, 431-436.
- 伊藤美奈子 1999 個人と社会という観点からみた成人期女性の発達 岡本祐子（編）女性の生涯発達とアイデンティティー個としての発達・かかわりの中での成熟— 北大路書房 Pp.87-112.
- 柏木恵子・若松素子 1994 “親となる”ことによる人格発達—生涯発達の視点から親を研究する試み— 発達心理学研究, 5, 72-83.
- 菅野幸恵 2001 母親が子どもをイヤになること：育児における不快感情とそれに対する説明づけ 発達心理学研究, 12, 12-23.
- 目良秋子 2001 父親と母親の子育てによる人格発達発達研究, 16, 87-98.
- 無藤 隆 1995 生活と生き方を支える 発達 63, ミネルヴァ書房 Pp.46-48.
- 永久ひさ子 1995 専業主婦における子どもの位置と生活感情 母子研究, 16, 50-57.
- 大日向雅美 1988 母性の研究 川島書房
- 大日向雅美 2001 母性研究の課題—心理学の研究は社会的要請にいかに応えるべきか— 教育心理学年報, 40, 146-156.
- 岡本祐子 1996 育児期における女性のアイデンティティ様態と家族関係に関する研究 日本家政学会誌, 47, 849-860.
- 小野寺敦子 2003 親になることによる自己概念の変化 発達心理学研究, 14, 180-190.
- 徳田治子 1995 母親の人生から子育てを見つめる 発達 63, ミネルヴァ書房 Pp.59-61.
- 徳田治子・無藤 隆 2003 母親になることの獲得と喪失 ナラティブアプローチを用いた質的分析 日本発達心理学会第14回大会発表論文集, 315.
- 氏家達夫 1999 親になること、親であること “親”概念への再検討 東洋・柏木恵子（編）流動する社会と家族 I 社会と家族の心理学 ミネルヴァ書房 Pp.137-162.
- 山口雅史 1997 いつ、一人前の母親になるのか？—母親のもつ母親発達間の研究— 家族心理学研究, 11, 83-95.

（主任指導教官 湯澤正通）